

Title	村落の社会変化と祭祀空間としての家の変遷
Author(s)	川口, 幸大
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー. 2010, 2010-17, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13668
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2010-17

村落の社会変化と祭祀空間としての家の変遷

川口幸大

村落の社会変化と祭祀空間としての家の変遷^{*}

2010年11月30日

川口幸大[†]

^{*} 本稿は2010年8月に中国江西省贛州で開催された第四回「現代中国と東アジアの国際環境」国際シンポジウムでの提出論文を改訂したものである。

[†] 東北大学・文学研究科・准教授

はじめに

本稿は、中国東南部に位置する珠江デルタの村落をフィールドとし、家屋の形態と家屋内に祀られているさまざまな祭祀対象の移り変わりを、村落社会の変容のプロセスと関連づけて議論しようとするものである。

中国の村落社会は、20 世紀半ば以降のみをとってみても、不断に大きな変化を経験してきた。共産党による革命と中華人民共和国の建国、土地改革、人民公社の編成、さまざまな政治運動、改革開放を契機とした経済発展と生活水準の向上、そして近年より顕著となっているグローバルな経済状況との接続等々である。こうした社会変化にともなって、人々のライフスタイルと彼らが暮らす家屋の形態も大きく変容してきた。現在では、いわゆる都市的な高層マンションのような住まいに暮らす人々は、とりわけ沿岸部では、都市であれ、農村であれ、けっして珍しくはない。

同時に、家屋とは人々が暮らすためだけの建造物ではない。家や建築を扱った人類学でことごとく指摘されているように、家屋は、人が暮らし、集い、生産消費活動を行う場であると同時に、住む人の世界観を投影し、儀礼的な行為を行う象徴的空間でもあるのだ(Carsten and Hugh-Jones 1995; ウォーターソン 1997: 11; Knapp 205:6)。新しい形態の家屋で暮らす今日の中国の人々は、家屋内においてどのような神々を祀り、そこで日常的にどのような祭祀をとり行っているのだろうか。家屋の形態が過去数十年間の間に大きく移り変わってきたとしたら、家屋内の神々やその祀られ方にもまた変化がおよんできたのであろうか。本稿では広東省珠江デルタの村落の事例から、これらの問いについて考えてみたい。

．調査地の概況：珠江デルタ

本稿が依拠するデータは、広東省広州市に属する S 村での現地調査から得られたものにその多くを依拠している。S 村は 19 世紀の末期にはすでに周辺村落の経済的な集積地であり、定期市が開催される市場町(マーケット・タウン)であった。中華人民共和国の建国後には人民公社が置かれ、1980 年代からは村の上位の行政単位である鎮政府の所在地となっている。S 村の定住人口は 2000 人あまりで、その 9 割以上を陳姓の人々と、そこに嫁いできた女性たちが占める。

改革開放によって S 村を含めた広州近郊の珠江デルタは大きな経済発展を遂げた。農村部にも工場や高層マンションが建ち並び、地下鉄も次々に整備されている。人々の収入はおよそ 2000 元(約 3 万円)で、農村部としては全国でも指折りの豊かな生活を送るようになってきている。今回の調査地である S 村は、広州市の東南部、珠江デルタの中心に位置し、成長著しい中国沿岸部農村のまさに典型であると言える。

．家屋の形態と祭祀対象の変遷

ここからは、実際の家屋形態の変遷に着目しながら、それにともなって祭祀対象の祀られ方がいかに移り変わっていったのかを見てゆく。タイムスパンを清朝末期の 19 世紀後半から今日までのおおよそ 100 年あまりにとったとき、調査地において家屋の形態が変わる、すなわち多くの人々が新しいスタイルの家屋を建てるのは、総じて二度の機会があった。よって本稿では、清朝末期の家屋について記したあと、その二つの時期である 1970 年代の半ばと 1990 年代末以降に建てら

れた家屋について順に述べてゆくことにする。そして最後には、ここ数年のあいだに少なからぬ村の人々が新たに購入し、住み替えたマンション形式の家屋についても簡単に言及する。

1) 20世紀以前の清代に建てられた家屋

この時期の家屋の多くは、「青磚」と呼ばれるねずみ色のレンガを積み重ねて建てられている。一般的に言って家屋には大きな窓を設けることはなかった。これは防犯と風水上の理由のためである。ただ、通気のために、幅15センチ高さ80センチほどの細長い隙間が壁に設けられていることがある。これは「石框」と呼ばれる。家屋は、たいてい二階建てであり、一階部分は主として「正庁」と呼ばれるメインルームが占める。正庁から見て東南側は厨房となっていて、その中には煮炊きをする竈が備えつけられている。また正庁の南側は吹き抜けになった中庭状の空間が設けられており、これを「天井」と呼んだ。この天井によって家屋の通気性が保たれることになった(陸・魏 1990:250-251)。正庁の両脇に設けられた細い階段を上った二階部分には二つほどの部屋があり、かつてはベッドが置かれていた。

次に、こうした形態の家屋の中にはどのような祭祀の対象が、どういったかたちで祀られていたのかについて見てゆくことにする。まず、入り口の門を入れて左側の壁には「門官」が祀られている。門官とは、入り口の扉に描かれた「門神」とともに、家屋に邪なるものが侵入するのを防ぐ役割をはたす神である。この地域のものは一般的に「門官土地福德」の文字を彫り込んだ石版を壁に埋め込んだ形態になっている(写真1)。

屋根のない中庭状のスペース、すなわち天井の壁には「天官賜福」が祀られている(写真2)。天官賜福とは毎戸に降臨した神であるという。だから、たいていはこのように頭上が開けた場所に祀るのだという。この家屋の場合は、地面から2メートルほどの高さの壁の上部に「天官賜福」と赤地に白色の浮き彫りがほどこされたプレートがはめ込まれており、プレートの周囲を縁取るように精巧な彫刻が施されている。その下部の、地面からおよそ1メートルの高さの位置には、線香とろうそくを供えるための赤色の筒型の容器が取り付けられている。



写真1：清代の家屋の門官
「門官土地福神」という文字が刻まれている



写真2：清代の家屋の 天官賜福

正庁の正面の壁の上部には、端から端までをわたすかたちで木製の棚が備えつけられている(写真3)。これは神と祖先を祀るための祭壇であり、「神台」と呼ばれる。神台の中央には幅60センチ長さ1メートルほどの木製のプレートが掛けられており、そこには「神」という文字が彫られている。これは文字通り当家の神である。その前には線香と供え物をささげるための台が設けられている。

神台の向かって左側には祖先の位牌が置かれている。神祇世界における地位としては神は祖先よりも上位に位置づけられているために、祭壇の中央に神を、左に祖先を配置するのである。位牌の後ろには「陳門堂上歴代宗親」と書かれた木製の板が、その左右には「福祿自天生」「珠璣隨地起」と書かれた対聯がそれぞれ掛けられている。また、左側面の壁には家族成員の遺影が掛けられている。

祭壇の下には現地の人々が「地主」あるいは「土地公」と呼ぶ土地神が祀られている。木版には「五方五土五帝龍神 前後地主護宅之神」と彫り込まれており、その前には線香を供えるための鉢が置かれている。土地神はその土地を守護する神であるとされ、村、村の下部単位、世帯といった居住ユニットごとに祀られていた。また、村より上位の県城などは城隍と呼ばれる神が守護するとされ、都市部のほぼすべてには城隍を祀った城隍廟があった。

厨房には竈の神である「灶君」が祀られている。この竈の神は人々の行為を監督するために天上の神から遣わされ、旧暦の12月24日にはその一家の一年間の様子を報告するために天上に帰ると考えられてきた。人々は神によい報告をしてもらえるように供え物を捧げて竈神を天に送ったのだった。竈神はそのあと12月30日に再び降臨し、次の一年もその家の行状を見守るために厨房に鎮座したのである。竈神の多くは、「定福灶君」といった文字を彫った石版を壁に埋め込んだ形態であった。

ここで、清代に建てられた当該の家屋に祀られている祭祀対象を整理しておけば、次のようになる。入り口には門を守る「門官」、中庭には天から降臨した「天官」、メインルームに設けられた祭壇には中央に神、向かって左側に祖先の位牌、祭壇の下には土地の神である土地公、厨房には竈の神である「灶君」がそれぞれ祀られている。それらの特徴は、家屋の構造の一部として「組み込まれて」いることである。祭壇は、厚く長い板を壁から壁にわたすかたちであったし、門官、天官、灶君は壁に組み込まれた形態のものであった。門官や天官は周囲に精巧な彫刻をほどこしたものであるし、祭壇中央の神や祭壇下の土地公のプレートも木の板を彫り込んだものである。後述するあとの時期のものと比べると、これらはいずれも、現地の人々が広東語で「有心機」と表現するところの、入念かつ精巧な作りであった。

家の住人たちは、こうした神々や祖先に対して、数々の祭日にしかるべきかたちで祭祀をとりおこなった。この家屋の形態と家屋内に祀られた祭祀対象のありかたとを後期帝政期のいわば



写真3：清代の家屋の祭壇

ロト・タイプと見るならば、1949 年以降にそのうちのある部分は大きく姿を変え、ある部分は持続、あるいは復興されゆくこととなる。以下それについて見てゆくことにする。

2) 1949 年以降、人民公社時代の家

1949 年に共産党は中華人民共和国を建国した。党は社会主義国家の建設に向けて、土地改革、人民公社の編成、「封建迷信」の打破などを次々と実行していった。また、大躍進に端を發した困窮や、文化大革命に代表される政治的な動乱、あるいは集団体制下においては概して豊かな経済状況にはなかったという事情などがこの時期の家屋の形態と家屋内の祭祀対象のあり方を決定づけることになった。

まず、1950 年代から 1960 年代にかけては、新しい家屋が建てられるということはほとんどなかった。その主要な要因はなんといっても、人民公社に組み込まれた農村の人々は個人的に富を蓄積することは難しく、また総じてみな豊かではなかったという当時の経済状況に求められるであろう。

家屋の中に祀られていた神や祖先にも大きな影響がおよんだ。共産党政府の政策によって、1949 年以降、とりわけ 1964 年からの文化大革命をピークとして、既存の文化や信仰が排撃された。村では、祖先を祀った祠堂や墓、神々を祀った廟が破壊され、儀礼や祭祀が行われることはなくなった。個々の家屋のレベルでも、祖先や神々を祀ったり、それらに対して祭祀したりすることはできなくなった。文化大革命の時期には、紅衛兵たちが家の中にまで入ってきて、そうした「迷信的な」ものがないか、家宅搜索をしたのだという。多くの人々は位牌や神のプレートを取り外し、見つからないように隠した。また、それらを焼いて処分してしまった者たちもいたのだという。各家庭には毛沢東の肖像画が配られ、それらに代えて掲げることが義務づけられた。

家屋をめぐる状況が変わり始めるのは、1970 年代の半ばを過ぎたころからである。このころから村では新しく家を建てる人が出はじめた。もとの家があった場所に、レンガとセメント製の 2 階建ての家を建てるというのが一般的であった。費用は、だいたい 5000 元(当時の為替レートで約 83 万円)で事足りたのだという。家屋の構造の特徴としてまず目につくのは、壁には 50 センチ四方の窓が設けられているということである。窓にはガラスはなく、鉄格子が 2、3 本取り付けられている。清代の家屋の細長い窓と比べると、かなり大きいという印象を受ける。また、中庭状のスペースはない。一階はダイニング・ルームと 3 つほどの部屋、二階も 2、3 部屋という構造になっている。面積の割には部屋の数が多く設けられている。清代の家屋と比べて、居住性や快適さをより重視している様子がうかがえる。

さて、このように 1970 年代の半ばすぎから新しい家が建てられるようになったわけであるが、神や祖先は表向きにはまだ祀ることはできなかった。1949 年以降、例えば清明節の折りにはこっそりと祖先の墓に参っていた人も中にはいたというが、この時期にはそうした信仰活動を表で行うのはまだ難しかったのである。よって、この時期に建てた家には、当初、祭壇もなければ、門官や天官や灶君が壁に組み込まれるかたちで設けられることもなかったのである。

このような状況が大きく変わるのは 1980 年代に入ってからである。1970 年代末から共産主義の実現を事実上棚上げし、経済発展を軸とした近代化を国是とするようになった共産党は、それまで排撃してきた伝統的な文化や信仰も政策に有益なものであれば積極的に公認するようになり、また大きな影響力をもたないものに関して基本的には強く介入することはなくなった。こうした

政策の転換にともなって、各地で寺廟や祠堂などが再建され、儀礼が再開されているのは数多くの報告にあるとおりである。

家屋内の祭祀対象も復興されはじめた。人々は、再び神々や祖先を家の中に祀るようになったのである。ただ、この時期に祀られ始めた祭祀対象には大きな特徴がある。それは、清代の祭壇や、門官・天官・灶君が家屋の構造に「組み入れ」られた形態であったのに対し、この時期の祭祀対象は「後付け型」とも形容できるものだったということである。

まず祭壇から見てみよう。写真に見るこの祭壇は 1980 年代に入ってから設けられたものである。壁の角に 50 センチ四方の木製の板を取り付けたかたちとなっていて、その板の上に祖先の位牌が置かれている(写真 4)。位牌がなければ、壁の角に取り付けた物置に見えなくもない。家を建てた当時はこの祭壇はなく、1980 年代に後付けしたものなのである。門官も、入り口の扉を入った脇の壁という本来の場所に設けられたが、赤地の紙に金色の文字が記された市販のものを貼り付けたかたちである。それは天官と灶君も同様である。天官は部屋を出て外壁との間にある屋根のない場所、灶君は厨房の足下といういわば所定の位置に祀られているのだが、ともに紙に文字を記したものを貼り付けたかたちである(写真 5)。家を新築した当時は、まだ神や祖先を祀ることはできず、こうした祭祀の対象を組み込んで家を建てることはできなかった。1980 年代の半ばから伝統的な文化や信仰への統制が弱まると、人々は祭祀対象を「後付け」し、再び祭祀を行うようになっていったのである。



写真 4：1970 年代末に建てられた家屋の祭壇



写真 5：1970 年代末に建てられた家屋の天官賜福

人民公社時代に建てられた家屋についていえることは、家屋の形態と家屋内に祀られた祭祀対象のあり方が、時間的なずれをともなって推移していったことである。家屋のかたちそのものは多くの場合 1949 年以降もしばらくは変わることはなかったが、祀られていた祭祀対象は姿を消した。次いで 1970 年代半ばから、新しい形態の家屋が新築されるようになるが、当初はそこに祭祀の対象は「組み込まれて」はいなかった。それら祭祀対象は 1980 年代半ばから、ほぼもともとあった位置に再び祀られるようになるが、文字を記した紙を貼り付けるという簡易で後付けの形態のものであった。こうした家屋の形態と祭祀対象のかたちが再び大きく変わるの、1990 年代の半ばを過ぎてからのことである。

3) 1990 年代半ば以降の家屋

家屋建築の新しい波が再び訪れるのは 1990 年代半ばを過ぎたころであった。この時期から 2000

年代の前半まで盛んに建てられた家の特徴は、外壁がピンクやオレンジのカラフルなタイルで固められた、4、5階建ての大規模なものだということである。こうした豪奢で大きな家を建てることができるようになったのは、「改革開放」によって珠江デルタが著しい経済発展を遂げ、人々の経済的な状況が大きく上向いたからである。人民公社が解体し、かつ個人の経済活動が認められるようになると、人々は農業をやめて、個人で商売を始めたり、工場での労働に就くようになり、生活水準を大きく上昇させることに成功した。さらに、1980年代以降、香港や海外に住む家族や親族の成員とのつながりが再び活性化し、彼らからの資金の援助を受けられるようになったという状況もあった。また、村政府は農地の使用权を香港の不動産会社に売ったり、そこに工場を誘致したりする一方で、人民公社の元成員たちに分配したり、比較的安い値段で売ったりした。土地を得た人々のうち、ある者はそれをさらに他人に売り、ある者はそこに新しく家を建てたのだという。

この時期に新しく家屋を建てた人々は、たいてい料理と食事と応接に1階を使い、生活空間としては2階を使用し、その他の階は両親や息子の一家が使っていたり、あるいは賃貸に出したりしている。1980年代からこの地域がめざましい経済発展をとげるにともない、内陸部から労働者たちが大挙して押し寄せ、村に住むようになった。1990年代末から2000年ごろにかけてはまさにそのピークで、珠江デルタ各地の大半の村では、本村人と同じくらいか、それを上回る流入人口が暮らすようになっていた。こうした状況によって、部屋を貸しに出すことが現金収入を得る一つの手段となったのである。新しい家屋には正面の玄関の他に裏にも出入り口が設けられており、階段に通じている。賃貸者たちが上階に行くのに家主たちの居住スペースを通過しなくてもすむ構造となっている。お互いのプライバシーも確保される設計となっているのである。

部屋の構造に目を向けると、大きな窓が取り付けられており、また床も壁もカラフルな色のタイルがしかれているので、まず明るく清潔な印象を受ける。ただし、どの窓にも堅牢な鉄格子が窓全体を覆うように取り付けられており、また出入り口の門も、清代や人民公社時代の木製の門とは異なって、鉄製である。住人たちの話によると、外部から人口が流入してきて以来、村の治安はひどく悪化したためだという。中庭はない。それぞれのフロアには浴室とトイレが完備されており、各部屋には鍵がかかるようになっている。フロアごとに見るなら、都市部のマンションとそれほど変わらないつくりとなっている。

次に、祭祀対象に目を向ける。大きな特徴の一つは、祭祀対象のうちのいくつかが再び「組み込み式」のものであるということだ。入り口にある門口土地福神は壁にタイルで埋め込まれたかたちとなっている。灶君も厨房の壁に埋め込まれたかたちのものとなっている(写真6)。これらは家屋の設計の際にすでに「組み込まれて」いるのである。門官もまた、多くが「組み込み式」か、柵が入り口の壁にボルトで固定された形態のものである。こうした祭祀対象については、建築会社がいくつかのモデルを提示してくれ、施主は家族で相談してどのようなかたちにするか決めるのである。つまり1990年代半ば過ぎにこうした家屋を新築する際には、設計の段階ですでに祭祀対象が「組み込まれて」いるのである。

次に祭壇について見ると、現在では、清代の家屋で見られた、部屋の端から端をわたすような祭壇が設けられることはなくなった。新しい家屋で使われている祭壇は棚状のもので、二つあるいは三つに仕切りがされていて、三段式のものであれば、上段に神、中段に祖先、下段に土地公が、二段式の場合は、上段の右側に神が、左側に祖先が、下段に土地公が祀られている(写真 7)。神祇世界の位置づけでは、神は祖先よりも上なので、祀る際にも、祖先よりも上、あるいは右側に置かれるのである。この棚式の祭壇は、もともと



写真 6：1990 年代末以降に建てられた家屋の灶君

香港の都市部の家屋で普及し始めたものが、この時期に広東でも使われるようになった。壁に埋め込まれた清代の祭壇とは違い、部屋のレイアウトに応じて配置換えをすることができ、便利である。

最後に天官について見よう。この時期に新しく建てられた家屋には敷地内に吹き抜けとなったスペースは設けられていない。それでは天官はどこに祀ってあるのかというと、それは入り口の壁である。天から降臨した神である天官はやはり頭上が開けた場所に祀らなければならない。新しい家屋には、中庭や、屋根のないスペースはないが、それでも同じように天に通じるよう、家屋の入り口に祀られているのである。

この新しい家屋の特徴をまとめるなら、まず家屋の形態としては、現代的な利便性と快適性の追求に大きな重点が置かれていることが指摘できるだろう。大きな窓は風水的な見地からは好ましいとはいえないのであろうが、明るい色のタイルとあわせて、生活に光と心地良さをもたらしている。また、複数階建てにしたことで、数世代の同居が、互いの独立性がより確保されたかたちで、可能になっている。家主の一家とその両親、あるいは家主とその息子たちの一家がともに暮らしていることが多い。各階に分かれつつ同一の家屋内に住むという、数世代同居の新しいかたちが見られるようになっていといえよう。また空いた階を全くの他人に貸しに出しているという形態も、これまでにはなかったものだ。これは、複数階建ての新しい家屋形態の出現と、出稼ぎ移民たちが数多く暮らすようになった珠江デルタ特有の状況が相互に関連して生まれたものだといえよう。



写真 7：1990 年代末以降に建てられた家屋の祭壇

祭祀対象について見れば、信仰活動に対する政府の統制が緩和されたことを受けて、多くの

神が再び「組み込み式」で祀られている。また、祀られる位置も、門官は入り口の壁、灶君は厨房というように、所定のところである。一方、「組み込み式」の祀られ方が再び見られるようになったとは言っても、祭壇は家の構造に再び「組み込まれる」ことはなく、また、吹き抜け状のスペースも設けられることはなくなった。しかしながら、神や祖先の祀られ方、すなわち、祭壇においては神は常に祖先の上あるいは右側に祀られるであるとか、天官は上空の開けた玄関の壁に祀られるといった点は変わっていない。祀られ方の構造そのものには顕著な持続性が認められるとあってよいだろう。

4) 都市部のマンションへ：新しい傾向

最後にここ数年の新しい傾向について簡単に述べておきたい。S村やその周辺の人々の中には、区を中心部、すなわち旧県城やその周辺にマンションを購入して移り住む人が出てきているのである。広州市の中心部と地下鉄で結ばれたということもあって、旧県城とその周辺には近年次々と高層マンションが建てられている。部外者が随意に出入りできないように、敷地の入り口にはガードマン駐在しているという、都心部に典型的なマンションである。実際にマンションを購入して移り住んだ人々は、農村部より治安もよいし清潔である、あるいは子供の教育のためには都市部の学校のほうが好ましいから、と述べていた。

興味深いのは、そうしたマンションにあっても祭祀対象が村落の家屋と同じように祀られていることである。例えば、部屋の入り口には門口土地福神が「組み込み式」のかたちで祀られているし、天官はベランダの頭上が開けたスペースに祀られている(写真9、10)。家屋のかたちと居住の形態は大きく変わったが、祭祀対象の祀られ方にはそれほど顕著な変化は見られないのである。



写真9：マンションの入り口に「組み込み式」で祀られた門口土地福神



写真10：マンションのベランダに祀られた天官賜福

・家屋の形態と祭祀空間としての家屋の変遷

中国の村落社会は、20世紀半ば以降のみをとってみても、数多くの変化を経験してきた。そしてこれまでにきてきたとおり、家屋の形態にも、そうした社会変化に密接に連動して、やはり何度かの変化の波があった。

20世紀以前に建てられた家屋は、もちろん現在の視点から見ればだが、窓は小さく、したがって室内は暗く、居住性に優れているとは言えないが、いくつかの祭祀対象は建物の構造に組み込まれており、かつそれぞれに精巧な意匠が施されていて、これも今日的な尺度で見ると、祭祀空間としては重厚なつくりであったと言える。本稿で言及した大家屋は経済的にかなりの程度裕福な者たちが建てたものであり、当時の一般的な住民たちの住まいを代表してはいないが、誰もが成功して富を得たらこうした家屋に暮らしてみたいという、一つの理想型であったことは確かであろう。

このような大家屋の多くは、建国初期の土地改革によって没収された後に分配された。しかし、人民公社期には大半の人々は経済的な余裕がなく、新たな家屋を新築することはできなかった。その後、中国政府が改革開放に踏み切った1970年代半ばから、徐々に家屋を増改築する動きが出てきた。このときには、レンガをセメントで固めて壁を白く塗ったり、大きな窓を設けたり、またより多くの部屋数を配したりと、家屋の形態には居住性が追求されたが、もとあった場所に新築、あるいは増改築されたケースが多かった。

1990年代半ばを過ぎるころからは、さらに新しい家屋建築のうねりが起こる。経済発展の気運に乗ってチャンスをものにした人々は、政府が農地を転用した土地を購入して4、5階建てのカラフルなタイル張りの家屋を建て、空いたフロアは貸しに出すという生活スタイルをとるようになった。このときの増改築ブームと新たな家屋の形態は、改革開放が軌道に乗って、住民たちがより裕福になったことに加え、村政府による農地の転用や、村への出稼ぎ移民の増加という、政策的・経済的な変化に密接に連動している。さらに2000年を過ぎるころからは、村から都市部へのアクセスの向上や、さらなる経済発展などが重なり、より都市近郊にマンションを購入して移り住むという新しい潮流が広がろうとしている。家屋の形態と生活のスタイルは、共産党政府の政策と、それともなう経済状況の移り変わりに連動して、60年あまりの間に数度の大きな変化を経験してきた。

では祭祀対象についてはどうだろうか。清代の家屋に「組み込まれる」ようにして配置されていた数多くの祭祀対象は、1949年以降は姿を消し、1970年代の末から新たに増改築された家にも当初は祀られてはいなかった。それらは、宗教や信仰活動に対する党政府の容認姿勢が確かなものとなりつつあった1980年代の半ば過ぎから、徐々に「後付け」のかたちで再び祀られるようになった。そして1990年代半ば以降に建てられ始めた4、5階建ての家屋には、大半が再び「組み込み」式で祀られるようになっている。

仮に清代の大家屋をプロトタイプとして見た場合、変化した点としては、祭壇が正庁の壁から壁を渡す形態のものから可動式の棚状のものになったこと、あるいは天官が祀られていた中庭状のスペースが家屋内から姿を消したということなどが挙げられる。しかし他方で、門官、天官、祭壇の神・祖先・土地公、灶君といった家屋内の祭祀対象の基本的な構成に変化はない。またそれらが所定の位置、つまり門官は入り口を入ったところの壁、灶君は厨房、祭壇が可動式になっ

ても神が祖先に対して上部、あるいは右側に、また中庭がなくなっても天官は頭上が開けた場所に祀られているという点にも変わりはない。祭祀対象の種類および祀られ方については、顕著な持続性を見て取ることができるのである。

おわりに

本稿では、家屋の形態と家屋内に祀られた祭祀対象の変遷を追ってきた。家屋形態は時代時代の政治経済的な環境からの影響を受けながら、幾度かの大きな変化の波を迎えてきた。一方で、家屋内に祀られた祭祀対象のありかたは、家屋の形態の変化と無縁だったわけではないが、むしろ共産党による政策からより大きな影響を受けてきた。また今日再び「組み込まれる」かたちで祀られるようになった祭祀対象からは、祭祀空間としての家屋が、いくつかの変更はあっても、清代の家屋からの構造的な持続性を顕著にしていることが読み取れるだろう。

文化人類学者の内堀基光は、インドネシアのイバンのロングハウスの変化を追い、新しく建てられたロングハウスはいくつかの構造的な変更によって、古いものと比較して空間的な象徴性を劣化させていることは明確だが、全体としての象徴的空間性は保たれていることを指摘している(内堀 2006:109)。ロングハウスを取り巻く社会状況が大きく変わり、ロングハウスの空間的な象徴性もそれと全く隔絶されたものではなく、実際にさまざまな変化は起こってきたのだが、「緩徐」的ともいえるもので、それは全体として空間的象徴性が保たれていることに表われているとしている(内堀 2006:110)。

今回取り上げた家屋の祭祀対象についてもこれと同じことが言えるだろう。近年の傾向として、マンションを購入して移り住んだ人々も、いくつかの神々を「組み込み」式で祀り、また天官もベランダに祀っている。しかし、今後より多くの人々がマンションへと移り住むとすれば、村落というコミュニティを基盤とした生活スタイルは大きな変更を余儀なくされるだろう。祭祀空間としての家屋と、そこでの祭祀の行われ方がどういった変化をたどるのが、あるいは依然として持続性が保たれるのか、引き続き注視していかなければならない。

文 献

- Carsten, Janet and Stephen Hugh-Jones (1995) "Introduction." In Janet Carsten and Stephen Hugh-Jones(eds.), *About the House: Levi-Strauss and beyond*, pp.1-46. Cambridge: Cambridge University Press.
- 陳代光 (1997) 『広州城市発展史』 広州: 暨南大学出版社。
- Jordan, David K. (1972) *Gods, Ghosts, and Ancestors: The Folk Religion of A Taiwanese Village*. Berkeley: University of California Press.
- Knapp, Ronald G. (2005) "China's Houses, Homes, and Families." In Ronald G. Knapp and Kai-yin Lo(eds.) *House Home Family: Living and Being Chinese*, pp.1-9. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 陸元鼎・魏彦鈞 (1990) 『広東民居』 北京: 中国建築工業出版社。
- 内堀基光 (2006) 「社会空間としてのロングハウス—イバンの居住空間とその変化」 西井涼子・田辺繁治(編) 『社会空間の人類学 —マテリアリティ・主体・モダニティ』 pp.92-115、京都: 世界思想社。
- ウォーターソン、ロクサーナ (1997) 『生きている住まい—東南アジア建築人類学』 布野修司監訳、京都: 学芸出版社。

村庄的社会变化与作为祭祀空间的房屋之变迁

川口幸大

The Transformation of the Village Society and the House as a Ritual Space

KAWAGYCHI Yukihiro

摘 要

本文以位于中国东南部的珠江三角洲地区为考察范围，并试图把作为祭祀空间的房屋的变迁与村庄社会的变化过程联系起来进行讨论。

把时间跨度设定于清朝末期的 19 世纪后半到现在为止的大约一百多年间，在调查地的房屋的形态变化，即许多人建造新风格的房屋的契机，总的来说有 1970 年代中期和 1990 年代末的两次。在那两个时期中，村庄社会的情况大大地改变，且都是以新的样式来建造房屋。但是另一方面，关于房屋里的祭祀对象的种类、祭祀方法、以及实际使用的祭祀方法，能看出与清代房屋之间的结构上的持续性。也就是说，门神、天神、祭坛上的神·祖先·土地公、灶君等屋内的祭祀对象的基本构成没有变化。同时那些所规定的位置，即门神位于门口附近的墙上，灶君在厨房里，即使是变成移动式的祭坛，依然神在祖先的上方或右边，即使没有天井了，天神依然在上方空着的地方，分别被供奉这一点也没有变化。然后就祭祀的方法来看，把神·鬼·祖先，在时期·供物·祭祀用品方面明确地区分开，进行适当的祭祀这一方面也不能找到明显的变化。

综上所述，本报告的结论是随着政治经济的情况、人们生活方式的变化，房屋结构发生巨大变化的同时，作为祭祀空间的房屋的结构上能发现显著的持续性。

(担当委员：木村自)

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>